

Title	淡路町時代
Sub Title	
Author	奥野, 信太郎(Okuno, Shintaro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.315- 317
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0315">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0315</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 淡路町時代

奥野信太郎

残念なことに、ぼくは佐藤君の中学生時代を知らない。

後年、慶応義塾で教師をやるようになってから、同じ中学にいて、しかも顔をおぼえていたのは、先輩としての佐原六郎、後輩としての島谷英郎の二氏だけであった。佐藤君は島谷君よりは年級が上であったから、当然おぼえていなければならなかったはずなのに、それが記憶にない。もともと島谷君は、級長をしていて、袖口に白い筋をつけていたので、とくべつに目だつ存在であったせいもあった。

しかしとにかく淡路町時代の開成であったから、時代はかれこれ共通している。教師の綽名も、オケラとか、スッポンとか、赤天とかいえば、もうそれだけでおたがいに通じあう。

こうして当時のことを回想すると、とにかくニコライ堂の崖下にあったあの校舎の生活が、一入なつかしく胸裡によみがえってくる。

そのころ佐藤君は本郷のほうに住んでいたと思う。あの中学に通ってくる生徒は、本郷、小石川の方面からくる生徒と、下谷、神田、日本橋の方面からくる生徒と、ほぼ二タ通りに分けることができた。その二タ通りの生徒の流れが、ニコライ堂の崖下の谷間に、落ちあうようなぐあいには集まってくるのであった。

ぼくは浅草の左衛門河岸から、毎日練堀町をぬけ、講武所から昌平橋というコースで、徒歩で通学していた。そして願みてどうみてもけっしていい生徒ではなかったと思

う。

中学の運動場の右隅の外に、湯屋があった。

その仲が、ぼくとは同級で、よく風月堂の二階にいった。今川橋のそばに、大木五藏の店があって、その仲も同級だった。この男ともよく学校の帰りに、あっちこち散歩した。そしてきまって一番最後には、堀留のパウリスタによって、そこでさんざん時間をつぶして、日の暮れ方、やっと帰るといふ毎日を送っていた。いわばじだらくな生徒であった。

そこへゆくと佐藤君は、いまでもそうだが、おそらくその当時から、けつして踏みはずすことのない、よく節度を心得た生徒であったにちがいない。ちがいないではない、たしかにそうであった。それを証拠だてるとっておきの話がひとつある。

佐藤君の同級には、異色の生徒が多かった。

俳優の滝沢修や、第一銀行の井上薫や、中央公論の藤田圭雄の諸君は、みんな佐藤君の同級である。

滝沢修の家は、こういう同級生たちの梁山泊であった。

学校の帰りには、たいてい滝沢の家によって、そこで閑談に時を移すのが、どうやら例となっていたらしい。もちろんそうした同級生どうしの閑談が楽しいから、自然、そうになったにはちがいないまいが、もうひとつそのほかに重要な理由があった。それは滝沢の妹がたいへんうつくしく、それが中学生たちにとっては、思慕的であったからである。

佐藤君もやはり毎日のように滝沢通いをやった一人である。そのくせほかの連中のように、一向思慕の情が表だてて評判にならなかった。佐藤君とても、やはり滝沢令妹讃嘆者の一人であったことは、紛れもない事実でありながら、それが少しも人の口の端に上らなかつたということ、やはりそこがかれの節度をわきまえた言動によるものだと思う。

酒をのんでも適量を心得ているから、けつして乱れることのないかれである。ときどきぼくは、かれをめぢやめち

やに酔わせてみて、馬鹿をいわせたら、どんなに愉快だろうかなどと、とりとめのない空想をして、楽しくなることがあるが、どうもこれはとどのつまり空想で、とても実現させることはむずかしいらしい。

烏兎匆匆、半世紀は夢のように去った。中野洋服店、菊洋堂、藪そば、江木写真館、淡路小学校、多賀羅亭、中川

## 朔さんのこと

朔さん。(朔さんと呼んでも失礼ではあるまい。そう呼ばせて下さい。この呼び音は極めて Sympathique な響きを持つているように私には感じられるから。)朔さんがもう還暦とは、自分の年をとったことを忘れて、年月の経つことの早いことを痛感させられる。この機会に朔さんの過去を特に朔さんの文筆活動の初期の頃をいささか回顧して

牛肉店と、こう埒もなくあの当時のいまわりの名前をあげてゆくと、佐藤君もきつと淡路町時代のことを、あざやかに思いだしてくれることであろう。

還暦といえは、人生の中入りである。これからトリマで、とにかく当日のいい芸がならぶはずだ。お願いしますよ佐藤君！

## 横 部 得 三 郎

みたいと思う。朔さんの塾の仏文科のために果した功績は今更云々するまでもない。もしポドレルがいなかったら、フランス文学はどうなっていたであろうかなど考えるのは、クレオパトラの鼻が曲っていたらなど想像するのと同じく、愚かなことであろうが、もし朔さんがいなかったら、塾の仏文科はどうなっていたであろうかなど、勿論結論